祈り（2016年）

Prayer

藤森 信行

Introduction of works

祈りをささげる天使の姿を、透明感のあるブルーカルセドニーの色から連想した。
「持つ人のお守りとして、心のよりどころとなるように」との考えから、手のひらサイズの置物として制作。
石の中の微妙な鱗模様を羽根一枚一枚に見立て、光の加減で柔らかさや繊細さをより一層表現できるよう工夫している。
あえて細部まで作りこまず、光が透過することによって変化する質感や曲線の柔らかさを意識して制作し、「自分らしい表現ができた」と自負する作品。
なめらかに研磨されたブルーカルセドニーのつややかさと、あえて原石の肌質を残した台座部分のコントラストが『祈り』の静謐さを印象付けている。

［サイズ］高さ11cm × 横9cm × 奥行4cm　　［素　材］ブルーカルセドニー

山梨ジュエリーミュージアム

山梨県甲府市丸の内1−6−1　山梨県防災新館1階
https://www.pref.yamanashi.jp/yjm/
開館時間：10:00〜17:30（最終入館17:00）
休館日：火曜日（祝日の場合はその翌日）、年末年始、その他、臨時に開館・休館することがあります。
入館料：無料
駐車場：92台　山梨県防災新館地下有料駐車場
（来館者は1時間無料）

伝統工芸士

藤森 信行

Vol.21

2020年10月発行

craftsman jewelry

craftsman jewelry file.21
nobuyuki fujimori
2020 October

山梨ジュエリーミュージアム発行

水晶美術彫刻の世界に飛び込み、未来を創る

アメリカから帰国、伝統工芸の世界へ

高校から大学卒業までアメリカで暮らしていた藤森は、アメリカで会計士の職に就くことを考えていたが、家の事情で帰国することとなった。日本に戻っての就職活動は一からのスタートであったことに加え、90年代後半の就職氷河期の真っ只中。

それでも興味のあった伝統工芸に携われないかという思いがあり、当時池袋メトロポリタンプラザにあった「全国伝統的工芸品センター（現・伝統工芸　青山スクエア）」に通い、情報を集めていた。ある時、藤森が彫刻に興味があると知っていたセンターのスタッフから「水晶彫刻の職人さんが実演に来るから、見学に来たらどうか」と声が掛かった。そこで出会ったのが甲州水晶貴石細工の伝統工芸士であった小竹貞山（こたけ ていざん）（2017年没）だった。このことが藤森の人生を大きく変えていくこととなる。熱心に実演を見る藤森に、小竹は「甲府の工場（こうば）を見に来ないか」と誘い、藤森は一も二もなく飛びついた。

幼少期から粘土細工が好きで、高校・大学の選択授業でも彫刻に親しんでいた藤森であったが、貴石の彫刻は見るものすべてが新鮮だった。見習いで働けないかと紹介してもらった先が、現在の職場でもある土屋華章製作所。先代の6代目社長土屋穣（みのる）（2011年没）はおおらかかつ人情味あふれる人柄で「雇えないけれども、まず一週間やってみたらいいよ」と門戸を開いてくれた。「もっと知りたい、続けたい、それには一週間では足りない」と強く感じた藤森は、土屋華章製作所の工房に通いながら雇ってほしいと頼み込み、ついに就職が叶うことになった。2005年秋に入社し、現在に至るまで有限会社土屋華章製作所の職人として活躍の場を広げ、制作にあたっている。

伝統と新しい風

藤森が貴石彫刻の作品を作る前には、対象となる実物の写真や既存の様々な彫刻作品からイメージを膨らませ、また解剖学の図鑑なども参考資料として、粘土を使った実物大の塑像を作り上げる。全体のイメージを掴んだところで貴石の彫刻を行う細工台に座り、貴石の中にこれだという形が見えるまで慎重に慎重を重ねて作業をしていく。制作において「自分は臆病だ」と藤森は苦笑するが、下準備を入念に行うことで、迷いなく完成まで辿り着けるのだろう。専門的な教育は受けていないと謙遜しつつも、学生の頃に学んだ彫刻の基礎が今の彼を支えている。

年に2回、山梨県水晶美術彫刻協同組合の主催で行われる水晶彫刻新作展と水晶彫刻若手作品展には、自社製品の特長でもある伝統的な作品とは方向性を変えた、叙情的で物語性の強い作品を発表している。自分の中での挑戦でもあるという作品の振り幅は、その後自社製品の新しい取り組みとして展開されることもある。

藤森には、水晶美術彫刻の世界に入った年齢がほかの職人より遅かった分、まだまだこれからという意識が常にある。長年制作に携わってきた目の肥えた先輩方から「いいものを作るね」と言ってもらえるようになることが一番の目標だ。そのために藤森は、人の日常に寄り添い、大事にしてもらえるような丁寧な作品作りを心掛けている。

しかし、未来を見据える為には1人の職人の努力だけでは足りないことも理解している。

2021年には創業200年を迎える土屋華章製作所を支える社員として、これからも自社工場での製品開発に力を注ぎたい。その強みを生かし、時代の空気を敏感に読み取ってお客様からのニーズに応え、更に会社を盛り立てたいと意気込む。

水晶美術彫刻を未来に繋げるために

仕事を始めて15年が過ぎ、職場の先輩や先代の社長など師と仰いだ方々もすでに亡く、他社の先輩たちに仕事の話を聞くことが多くなったが、皆快く教えてくれる。

そのような中で後継者問題や、若手職人不足の話なども聞くようになり、甲州水晶貴石細工のこれからを考えるようになった。このままでは古くから使われてきた道具や技術、知識が途切れてしまうと不安に感じることも増えた。

技術を受け継いでいくこと、そして時代のニーズに合った作品を作り出していくこと。一朝一夕にはいかない仕事だ。だからこそ自らの感性を信じ、その上で周りの声に耳を傾けて作品に反映させる。持つ人の心にそっと寄り添い、日々の支えとなる様な作品作りを目指して、伝統産業の若き担い手として藤森は今日も挑戦を続けている。同志を増やし、水晶美術彫刻をより一層盛り立てていくために。

藤森 信行（ふじもり のぶゆき）

伝統工芸士

有限会社　土屋華章製作所
山梨県甲府市湯村1丁目13－11
Tel:055-252-3485